

## I know you! ～23年ぶりのベトナムハノイにて～

国立国際医療研究センター 国際医療協力局 運営企画部

保健医療協力課長 岩本あづさ

### 「第1回国際感染症等専門家養成研修」の思い出

1998年秋、国立岡山病院（現・国立病院機構岡山医療センター）の新生児科で働いていた卒後6年目の私に、学生時代の先輩から電話がかかってきました。「自分が現在所属する国立国際医療センター（現・国立国際医療研究センター）の国際医療協力局が、全国の国立病院職員向けに感染症対策を中心とした国際協力の研修を開催することになった。学生の時から『将来は国際協力の仕事をしたい』と言っていたあなたにぴったりの研修なので参加しませんか?」というお誘いでした。「もちろん行きたいです!」と即答したものの、約4か月の研修期間、自分が岡山で担うことになっている当直や外来をどうしたらよいのか悩みました。最終的には上司のご尽力で代わりの方の短期雇用が可能となり、私は研修に参加できることになりました。当時は二国間の技術協力に、国立病院のスタッフを積極的に送り出すため「国立病院国際協力ネットワーク」をつくらうという動きがあり、岡山病院もその1つに選ばれていたことを後で知りました。期待いっぱい東京に向かい、駒沢公園の東京医療センター敷地内にある寮から、毎日はりきって早稲田の国際医療センターに通いました。「同級生」は計5人、いずれも「ネットワーク」に指定された施設の医師で、私以外の4人は男性の救命救急医でした。新興・再興感染症を中心に、紛争地における難民の医療や予防接種拡大計画など、グローバルヘルスの各論を日本の第一人者から少人数で学ぶ日々は、私の人生の中でも屈指の充実した楽しい経験となったのです。約

2か月の国内研修後に年が明け、年末年始の岡山での当直も終えて、海外研修先のベトナムに向かいました。

### ベトナムハノイのバクマイ病院にて

ベトナムでの研修期間1か月中、前半をホーチミンで過ごした後、首都ハノイに移動しました。1月でも太陽が照りつけて熱気にあふれていたホーチミンと比較すると、朝晩肌寒いほどのハノイは曇りの日も多くしっとり落ち着いた風情のある街という印象を受けました。地方に行く機会もありましたが、一番多くの時間を過ごした場所が、現在も日本と非常に関係が深い「バクマイ病院」です。バクマイ病院は1911年に設立された歴史ある国立病院で、ベトナム戦争中は爆撃により大きな被害を受けたとのこと。1998年から日本の支援で現在の近代的な病棟の建設が始まっていましたが、当時はフランス植民地時代の面影が残るコロニアルな建物の中で研修を受けました。現地で長年熱帯病を研究しているベトナム人の先生方が、「外国人を受け入れる研修にはあまり慣れていないけど」と言いつつ熱心にマラリアや日本脳炎などの講義・実習をしてくださいました。ちなみに研修を終えて岡山に戻った直後、アフリカでマラリアに罹患した可能性がある方が来院され、バクマイ病院で習った通りに血液塗抹標本の顕微鏡検査を行い、原虫を探しました。ベトナムでの実習がこんなにすぐに役立つなんて!と感謝したことを憶えています。

ところでバクマイ病院での研修中、スケジュール調整や教材配布、講義の通訳から毎日のお弁当の手

配まで、きめ細やかなお世話をしてくれたHさんという女性がいました。当時「院長秘書」だったHさんは、大学卒業後まもない若手スタッフながら、いろいろなことに気を配り機転のきく一生懸命な方でした。女性の研修員が私一人だったこともあり2週間とても仲良くなり、帰国前日の送別会には二人でベトナムの民族衣裳「アオザイ（ホーチミンでは「アオヤイ」）を着て写真を撮りました（写真1）。ただ、ホーチミンで作った私のアオヤイはハノイのものより裾が長く模様も微妙に違ったようで、「ハノイのアオザイとはだいぶ違うね」と笑い合ったことを憶えています。

### 23年後…‘I know you!’

私はこの研修に参加したことがきっかけとなり、2000年に岡山から国際医療協力局に異動しました。その後月日は流れ、この間私はラオスに5年、カンボジアに4年、と、どちらもベトナムの隣国であるインドシナで長く暮らしました。ハノイ空港も乗り継ぎで頻繁に利用していたのですが街に出る機会はなく、仕事でバクマイ病院に関わることもありませんでした。

2021年に私は国際医療協力局の中で「ベトナム拠

点病院」の担当者となりました。前述したように、ハノイのバクマイ病院は2000年代以降、日本の政府間援助の重要な対象施設となり、国際医療研究センターもバクマイ病院内に「拠点事務所」を設置して、研究や研修、医療協力のために多くの職員が渡航するようになってきました。私が担当者として最初の挨拶メールをバクマイ病院宛に送ったところ、返信にはいきなり‘I know you!’と書かれていて驚きました。「あなたは昔、私が病院案内をした方ではないですか？ お名前を見て思い出しました」（写真3）と書かれたメールの差出人はあのHさんで、現在はバクマイ病院の国際課長として、諸外国との連絡調整にあたっているとのこと。

コロナ禍がやや落ち着き海外出張が可能となった2022年7月、私は23年ぶりにバクマイ病院を訪問しました。Hさんに現在の私が分かるのか？ 私も今のHさんを同定できるのか？、かなり心配だったのですが喜憂に終わり、「お互いちょっと（横に）大きくなったけどすぐ分かったね」と再会を喜びあいました。1997年の入職以降、Hさんはのべ6人の病院長にお仕えしながら日本で学ぶ機会も得て、日本との協働プロジェクトを複数担当してきたとのこと。部下数人にいろいろ指示を出しつつきばきと

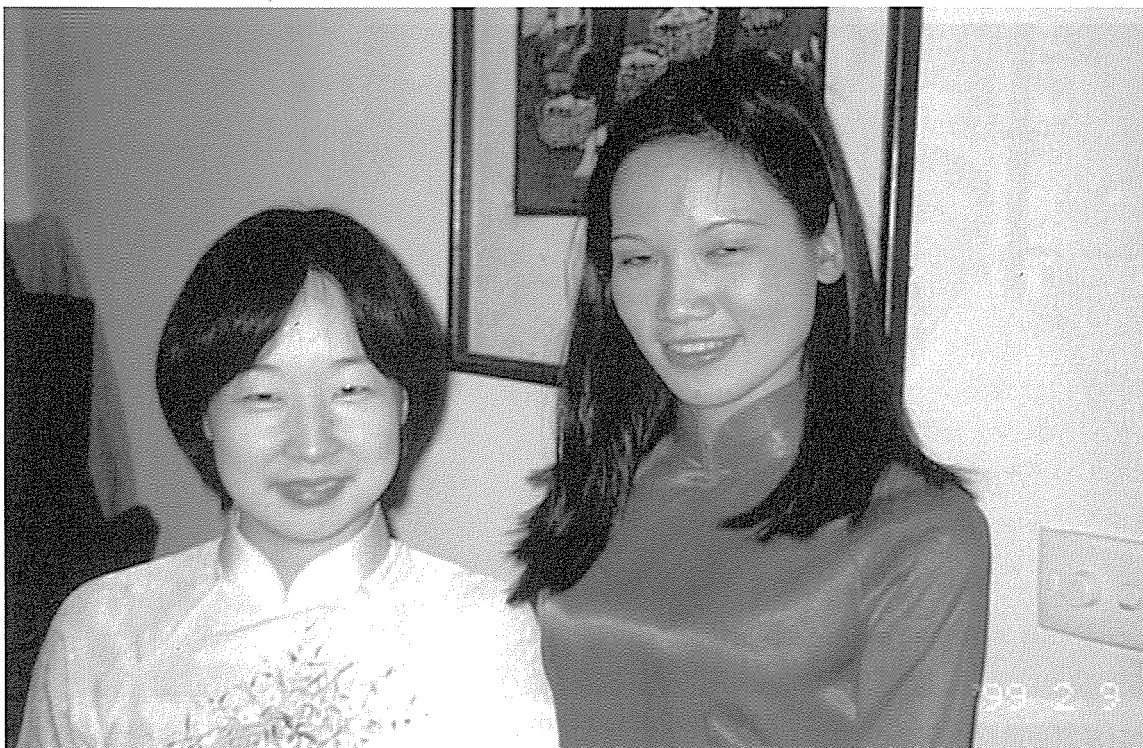


写真1 アオヤイとアオザイを着て（左：筆者、右：Hさん）

業務を進めている彼女の姿を垣間見て、初めて出会った時からずっとバクマイ病院でがんばってきた彼女の23年間に思いを馳せました。同時に、岡山から国際医療協力局に異動後いろいろな国での経験を経て、自分の原点の一つとも言えるバクマイ病院に「戻って」きた自分の23年をふりかえってみる機会ともなりました。

写真2は、再会の日には私を歓迎するスライドを映しつつバクマイ病院の会議室で出迎えてくれたHさんとのツーショットです。私の帰国後、お互いにアルバムを引っ張り出し、当時の写真を探し出して交換しました(写真1, 3)。Hさん、これからお元気で、2022年のツーショットも二人一緒になつかしく眺める日が来ることを願っています！



写真2 23年ぶりの再会ツーショット(2022年7月7日)(左:筆者、右:Hさん)



写真3 23年前の研修にて(中央:Hさん、左:筆者)